

第1回 『夢判断』にみる退行の理論

重元寛人

S・フロイトにとって事実上の処女作にあたる『夢判断』¹には、並々ならぬ意欲と労力がこめられ、きらめくばかりの洞察にあふれています。特に最終章の「夢事象の心理学」は、初期のフロイト理論を体系的に論述したものとしてきわめて重要なものです。ただし、意欲的なだけに難解でもありますから、ここからフロイトに「入門する」のは、いわば登山の初心者がいきなりエベレスト級の山をめざすようなものになりましょう。もっと平易な道からはじめるやりかたもあるでしょうが、ここではあえて困難に挑戦することにします。なぜなら、登山の喜びが厳しさの克服にあるように、難しい著作にこそフロイトの醍醐味がたっぷり詰まっているように、私には思えるからです。

では、はじめましょう。まず『夢判断』の目次を開いて全体の構成を眺めてみます。

- 第1章 夢の問題の学問的文献
- 第2章 夢判断の方法——ある夢实例の分析
- 第3章 夢は願望充足である
- 第4章 夢の歪曲
- 第5章 夢の材料と夢の源泉
- 第6章 夢の作業
- 第7章 夢事象の心理学

第1章では夢についての以前の文献について検討されます。ここは書く側のフロイトもかなり苦痛であったというように少々退屈なので、読む方も挫折しないように。

第2章に進むと、有名な「イルマの注射の夢」が登場します。これはフロイト自身が1895年の夏に実際に見た夢であり、彼の夢分析がなされた最初の実例として記念碑的意味を持つものです。ここは是非とも原文にあたってみてください。この夢についての詳細な自己分析が紹介された後、章の最後でこの本のメインテーマが語られます。

今ここに示されたような夢判断の方法を採用するならば、夢は実際にひとつの意味を持

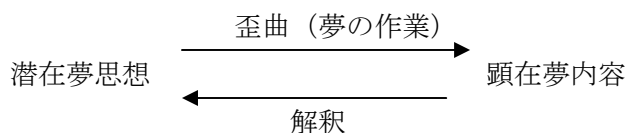
¹ 新潮文庫『夢判断』（高橋義孝訳）上・下巻。以下の引用はこの版のページで示します。人文書院のフロイト著作集では第2巻全体に相当します。出版は1900年。それまでにも『ヒステリー研究』や神経症についての論文はありますが、フロイトの単独の心理学的著作として単行本で

っており、在来多くの研究家たちが考えたように、決して支離滅裂な脳活動の表現ではないということがわかるはずである。夢判断を終ってみると夢というものがひとつの願望充足であることがわかるのである。

『夢判断』上巻 158 ページ

「夢というものは願望充足である」、これが『夢判断』全体を貫く主題です。「難解だ」というわりには単純じゃないかって？いやいや、ここでは単に「願望充足的な夢もある」と言っているのではなく、「夢は、それがどんなに支離滅裂であつたり、また苦痛に満ちた内容のものであつても、すべて願望充足である」と主張しているのです。数学の証明問題でも「すべて……である」ということを証明するのは難しいものです。なぜなら、たったひとつの例外があるだけでその命題は成立しなくなるからです。

それはともかく、この主題は第3章に引き継がれ、さらに第4章では夢が願望充足であるのにそれが一見わかりにくいのは、夢の受ける様々な「歪曲」のためであると説明されます。我々が実際に見る夢すなわち「(顕在) 夢内容²」は、夢の真の姿である「(潜在) 夢思想」が「夢作業」によってさまざまな歪曲を受けたものであると。夢を見た本人の連想を参考に顕在夢内容を解釈³することによって潜在夢思想を明らかにすれば、それが願望の充足であるということがわかるのだといいます。以上を図式化すると次のようになるでしょう。



第5章では、夢の材料として最近のできごとの記憶がどのような役割を果たすか、また夢の源泉として遠い幼少期の印象がどう関わってくるのかについて、多くの類型的な夢を紹介しつつ解明していきます。

第6章は、「夢の作業」についての説明です。夢の作業とは、潜在夢思想が歪曲されて顕在夢内容が作られる際の、無意識のプロセスのことです。それは4つの過程、すなわち圧縮・移動・戯曲化・第二次加工に分類されます。これらについて具体的な夢の例をいくつもあげながらわしく解説していきます。

出版されたのはこの本が初めてでしょう。

² この「夢内容」と「夢思想」という2つの言葉については、フロイト自身が少しずつ違った言い方をしている混乱しやすい。「顕在内容—潜在内容」「顕在的夢内容—潜在的観念材料」「夢の(顕在)内容—夢の(潜在)思想」など。これらの違いに意味があるのかどうかはよくわからない。

³ 「夢解釈」というと、夢の内容さえ伝えればざっとその意味を教えてくれるようなイメージを抱いている人もいますが、フロイトの夢解釈はそのようなものではありません。それは、夢の中のひとつひとつの要素について、夢を見た人の連想を頼りに意味を探っていくという根気のいる作業であり、精神分析の自由連想に似た過程なのです。

ところで、潜在夢思想が顕在夢内容に変化するのなぜなのでしょう。潜在夢思想が夢の本来の形であるならば、そのまま夢になってもいいじゃないかという気もしますが。これは夢の本質にもかかわる重要な疑問なので、ここでは完全な説明はできませんが、ひとつには「検閲」の働きによるといえます。非常におおざっぱに言いますと次のようなことです。私たちの心の中には、覚醒しているときでも、意識的に考えていることのほかに、無意識に考えたり欲求したりしていることがあります。それらの観念は、私たちの価値観に合致しないといったような理由から、無意識のうちに検閲を受け、意識に登ることができない、フロイトはそう考えました。この検閲は、睡眠中にも力を弱めながら活動をし続け、潜在夢思想を歪曲してその真意をわかりにくくするという働きをします。あまり正確な説明ではないのですが、とりあえずこのように考えておいてください。

そしていよいよ第7章です。冒頭で「火傷をする子供の夢」という実例が示され、これまでの論旨をまとめつつ理論が展開されていきます。

夢は心のきわめて重要な所産であり、心の活動である。夢の原動力はいつでも例外なしに「満たされるべき願望」である。夢が願望であるということが一見不明瞭であったり、夢に多くの奇怪な点や荒唐無稽な点があるのは、夢が形成されるさいにこうむったところの検閲の影響に起因しているのである。この検閲の目を免れようとする要求(1)の他に、夢形成にあたっては、(2) 心的材料圧縮への強制、(3) 感覚的形象による表現可能性への顧慮、それから、いつも必ずそうだとはいえないが(4) 夢の像の合理的かつ辻褃の合った外観への顧慮などがそこにはともどもにはたらいっている。

同下巻 289 ページ

夢がどのような歪曲を受けるかというのはケースバイケースであり、上記(1)から(4)がどれだけ働いているかという配分も夢ごとに異なります。例えば、子供の夢などは比較的歪曲が少ない場合が多いそうです。生後22ヶ月になるフロイトの甥は、箆いっぱいのお餅をフロイトへの誕生日プレゼントにさしだしたその晩、お餅をぜんぶ食べてしまった夢を見たといいます(上巻170ページ)。これなどは、あからさまな願望充足でしょう。しかし、このような歪曲が少ない夢においても必ずおこる変化があります。

しかしこれは夢過程のもっとも一般的な、かつもっとも顕著な心理学的性格である。つまりある思想・観念、概して望ましい思想・観念は夢の中では客観化され、一場面として表現され、あるいはよくいわれるように「体験」されるのである。

…… 子細に観察すると、こういうことがわかる。つまりこの夢の発現形式の中には、二つの互いにほとんど関係のない性格が浮き出している。その一方は、ある事柄・事件を「おそらく」を抜きにした現在の状況として描写するということであり、他は観念の視覚的形象および会話への置き換えである。

もともと夢思想は、抽象的な思想・観念ですが、夢内容はそれが現在の出来事であるかのように、ある種の知覚（多くは視覚）を伴って「体験される」のです。上記の子供の夢の例で言えば、「桜ん坊が食べたかった」という考えが「桜ん坊を食べている」という夢の中で体験に変わったこととなります。

こういう風に、ある抽象的な観念が知覚を伴い体験されることを「退行」といいます。退行というと現在では「子供がえりをすること」という意味で用いられることが多いようですが、フロイトはもっと広い意味でこの言葉を使っています。その意味を正しく知るためには、心的機構についての初期の**局所論**について理解する必要があります。

心的局在性

「局所論」の前提になる考え方は、「**心的局在性**」という、ややわかりにくい概念です。これと少し似ている考え方に、精神医学の別の分野である「神経心理学」という学問があります。例えば脳梗塞などの病気で、脳の左半球前頭葉にある「ブローカ野」という場所が損傷をうけると、言葉を聴いて理解できても自分では話せないという症状（運動性失語）があらわれます。このことから、脳のこの場所は言語の表出をつかさどる中枢であると考えられます。こういう風にして、脳の特定の「場所」とその機能を結びつけていき、全体として脳がどのように働くかを研究するのが神経心理学です。フロイトは、精神分析をはじめの前にこのような脳の局在性についての研究をしていたこともあり、失語症（脳の損傷によって言語機能が障害を受けた状態）についての著作も発表しています⁴。ですから、当然このような、「脳における解剖学的局在性」という考えもフロイトの頭にはあったでしょう。しかし、ここで「心的局在性」という時の「局在」とは、脳の解剖学的な場所という意味ではなく、あくまでも比喩的な概念なのです。それは、心の働きをいくつかの過程に分解して、そのひとつひとつの機能が遂行される「場所」というものを想定しようという試みです。それによってある機能を遂行する場所と別の機能を遂行する場所が近いとか遠いとか、どんな順番や方向性をもっているかということ論じることができるようになります。

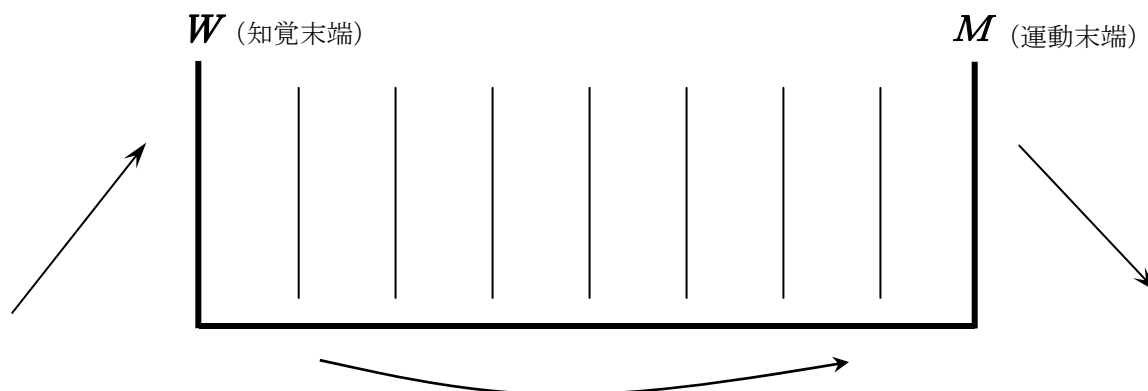
と、言っても抽象的でわかりにくいでしょうから、新潮文庫版『夢判断』下巻 294～302 ページに展開されている、局所論から抜粋しながら具体的に説明していきましょう。フロイトは心という装置を、望遠鏡のような「組みたて道具」に例えました。

そこでわれわれは、心という装置をひとつの組みたて道具として考えてみよう。この道具の諸部分を**検問所 Instanzen**あるいは解りやすいように**組織 Systeme**と呼んでおく。するとわれわれはこういう期待をいだく、すなわちこれら諸組織はおそらく、たとえば望遠鏡

⁴ 『失語論・批判的研究』（金関猛 訳，石澤誠一 解題）平凡社

において種々のレンズが順々に並んでいるように、互いにあるコンスタントな空間的方向づけを持っているのではあるまいか、と。……（中略）……さてこれ以下においては、心という装置の諸構成部分（組織）を、言葉を簡単にするために、ただ単に「 Ψ 組織」と呼ぶことにしよう。

さてわれわれの眼につく第一のことは、このような複数の Ψ 組織から組み立てられた心という装置は、ある方向を持っているということである。われわれの心的活動はすべて、（内的あるいは外的の）刺激から発し、神経支配に終わる。したがってわれわれはこの装置に、知覚末端と運動末端とがついているものと考え。知覚末端には、知覚を受けとる一組織があり、運動末端には別の組織があつて、運動力の水門を開く。心的過程は、一般的にいつて、知覚末端から運動末端へと経過する。心という装置のもっとも一般的な図式としては第一図のごときものが考えられよう。



第一図

このように、局所論では心の装置を「 Ψ 組織」という部品が方向性を持って順番に並んでいるようなものとして考えます。刺激が外界からくる場合を考えますと、私たちはいつも外界からの視覚・聴覚その他の情報から現在の状況を知り、何かを感じ、考え、そして何かの行動をとります（この場合「何もしない」というのもひとつの行動を選択していることになります）。つまり外からの刺激が知覚末端にやってきて、複数の Ψ 組織を刺激が伝わりながら複雑な過程をへて、最終的に運動末端に到達して行動にでるわけです。

このような心という装置（心的装置）の働きのうち、もっとも単純なものが「反射」と呼ばれる現象です。例えば生まれたばかりの赤ん坊の口元に指を差し出すと、赤ん坊はその指に吸い付いてきます（吸引反射）。これは、赤ん坊がおっぱいを吸うために本能によってプログラムされた行動です。この場合にもごく単純ではありますが、知覚からの刺激（口元への触覚刺激）が心的装置に伝わって一定の行動（吸い付く）を生じさせているという過程があります。別の例では、私たちが誤って熱いストーブを手で触ってしまったとき、「反射的に」手を引っ込めるでしょう。この場合も、「熱い」という手からの知覚が「手を

引込める」という行動を生じさせています。これら2つの例では、一定の刺激に対していつも一定の行動がえられています。これが「反射」の特徴で、そこには「感情」とか「思考」といった心の働きらしいものはみあたりませんが、こういったものをすべての心理過程の一番単純な出発点とみなし、すべての心の働きはその中間部分（知覚末端と運動末端の間の過程）が複雑になったものと考えてみることにします。

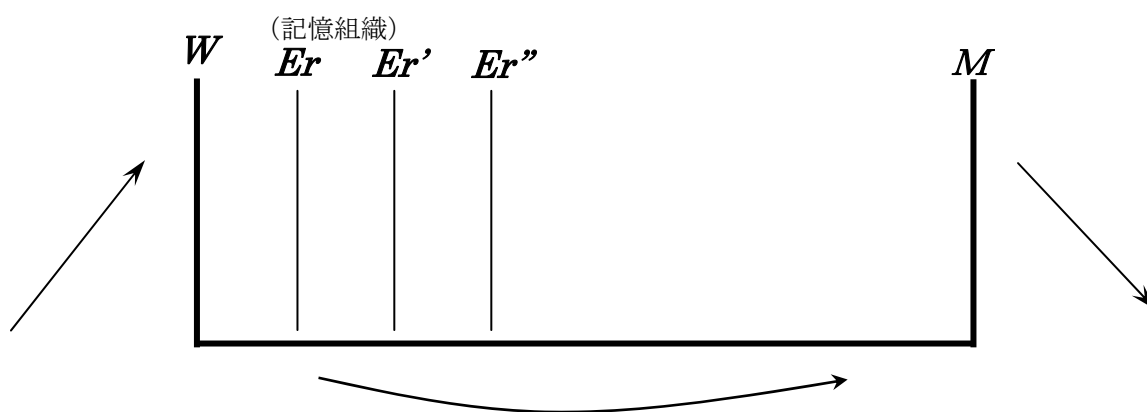
少し複雑にして、例えば「お腹がすいている時に目の前にりんごがあったので、手にとって食べた。」という一連の過程はどうでしょうか。まず、リンゴについての主に視覚からくる知覚刺激があります。そして「空腹感」という体内からくる刺激がもたらされます。これらが、心的装置の左側の知覚末端から入力されると、まずその映像からそれが「りんご」という食べ物であることの認識があり、体内からの空腹感と合わさって「そのりんごを食べたい」という欲求が生まれ、さらにそのりんごを食べても良いかどうかといった複雑な判断がなされ、最終的に「手を伸ばしてそのりんごを取り上げ、口に持って行ってかぶりつく」といった一連の行動が生じます。

反射の例と比べると、飛躍的に複雑になりました。しかし、この複雑さは本質的にはひとつのことに集約されます。すなわち、ここでは心的装置において、「過去の記憶に照らし合わせてなんらかの判断をする」という重要な過程がみられるということです。例えば、その赤くて丸い物体を見て、それを「りんご」という「食べ物」である、と判断するためには、その人が過去にりんごを見たことがあり、おそらく食べたことも何度もあって、りんごにまつわるいろいろなことを記憶している必要があります。そして、今回このりんごを食べた経験もひとつの記憶として心に刻み込まれ、今後の様々な行動の判断材料になるでしょう。

つまり、心的装置の一つの重要な特徴として、「記憶する」ということがあげられます。では、この「記憶」という現象はどのようになされるのでしょうか。『夢判断』の記述にそって見ていきましょう。

さてわれわれは、知覚末端において第一次分化が生ずると考えて差支えない。われわれのもとに達する諸知覚は、われわれの心の中に、ある痕跡を残す。この痕跡をわれわれは「記憶痕跡」と名づけることができる。この記憶痕跡に関係する機能をわれわれはつまり「記憶力」と呼んでいるのである。さてぜがひでも心的諸過程を諸組織に結びつけようとすると、記憶痕跡はただ、それらの諸組織の諸要素における持続的諸変化のうちにのみ存在しうることになる。ところで、もし同一の組織が自己の諸要素に受けた諸変化を忠実に守り通し、しかも変化への新しいきっかけに対してつねに新鮮かつ摂取的に適応してゆかなければならないとすると、明らかにそこにいろいろの困難が生ずる。このことは、すでに別の方面から述べておいた。そこでわれわれの試みを導いている原理に従って、われわれはこれら二つの作業を相異なる二組織に振分けるであろう。われわれはこう仮定する、心という装置の最末端の一組織は知覚刺激を受容れるけれども、それを保持しておかない。

つまりその一組織は記憶力を持たない。そして、この第一組織の背後に第二組織がある。この第二組織が第一組織の瞬間的興奮を持続的痕跡に置き換える。するとわれわれの心という機械は第二図のごときものと考えられよう。



第二図

われわれが組織 W (知覚組織) にはたらきかけてくる諸知覚を持続的に保存する場合、この知覚の内容以外の何ものかをも同時に持続的に保存するということは知られている。またわれわれの諸知覚は記憶中において互いに結ばれあっており、しかもそれらが結ばれあっているのは何よりもまず、それがかつて同時に出会ったためであることも証明される。これを連想の事実と呼ぶ。ところで組織 W はそもそも記憶力を持っていないから、その組織はまた連想の用に供せられる記憶痕跡をも保存できないということは明らかである。組織 W の個々の要素は、もしある新しい知覚に対して、それ以前の結合の残滓が勢力を揮うのであったならば、その機能を著しくそこなわれるであろう。だからわれわれは連想の基礎地盤として記憶組織を想定せざるをえない。

(中略)

これら Er 組織 (記憶組織) の第一のものは、いずれにせよ、同時性による連想の定着を含んでいるであろう。しかし遠く離れて存在してる Er 組織中には、同一の興奮材料が出会いの別の方法に従って配列されているのであろう。そのために、たとえば類似性その他の関係はこれらのあとのほうの諸組織によって表現されるのであろう。こういう組織の心的意義を概念によって現そうとするのはむろん無用のことであろう。こういう組織の性格は、記憶素材の諸要素に対するその諸関係の緊密さにあるのであろう。すなわち、もしわれわれがもっと深遠な理論を引合いに出そうと思うならば、その性格は、これらの諸要素へ向かっての誘導抵抗のさまざまなる度合のうちにあるのであろう。

なかなか難しいですが、上であげたりんごの例で考えて見ましょう。まだ小さい言葉も十分にわからない幼児が、はじめてりんごを見たとしましょう。彼は、興味深そうにりん

ごを触ってその感触を確かめ、やがて手にとって口のところに持っていき、ぺろぺろ舐めたり、においをかいだり、かじったりしてみます。この時、幼児の頭の中ではなにがおこっているのか想像してみましょう。こんな子供の考えを言語化するなどはナンセンスですが、他に表現法がないのであえて言葉で表してみます。「なんだろう、この赤くて丸いものは。触ってみると冷たくてつるりとしているな。持ってみよう。うんちょっと重たいけどなんとかもちあげられる。くんくん、フルーティーな香りだな。おいしそうだ。ぺろり、あんまり味はしないかな。がぶり、おお、あまずっぱい味の液体が。おいしいなあ。」

ここでは、りんごについての視覚的、触覚的、温度覚的、嗅覚的、味覚的といった諸知覚が同時に生じ、出会う、ということが起こっており、そしてこれらの特有の知覚が同時に生じたということが記憶されます。この幼児が何度もりんごを体験して、こういった記憶を重ねていくと、彼はやがてそれが丸くて赤くて甘くおいしい食べ物だということを感じるでしょう。つまり、りんごについての**連想**が記憶されたということです。そして、大人が「りんご」という名称を教えることで、それが「りんご」と呼ばれる物体であることも学習するでしょう。さらに、りんごがみかんやバナナなどと共に「果物」という上位概念の範疇に属するということを知り、それが木になる果実で、果樹園で栽培されて八百屋で売られることや、某コンピュータ会社のロゴマークに使われていることなど、それに関する様々な知識を学びます。また、家族でりんご狩りに行った楽しい思い出、兄とひとつのりんごを取り合って喧嘩をしたことなど、この果物にまつわる個人的な経験も記憶されていくでしょう。このような、りんごに関する膨大な情報はどのように記憶されているのでしょうか。上記の局所論によれば、りんごが「丸い」、「赤い」、「甘い」といった、知覚によって知られる性質を持っているということは、心的装置の比較的左よりの、すなわち知覚末端に近い記憶組織に保存されているようです。りんごと他の植物の関係といった抽象的なことや、りんごに関する個人的な思い出といったことは、心的装置の比較的右よりの、知覚末端からより遠くの記憶組織に保存されているでしょう。こんどは記憶組織ごとに見てみると、それぞれの記憶組織（Er, Er', Er"……）には、それぞれに特有の観点からのりんごに関する記憶が刻み込まれています。ひとつひとつの記憶組織には無数の記憶組織要素があり、それらが互いに連想の網でつながれ、ネットワークを形成しています。ある記憶組織要素 a は、別の記憶組織要素 b と強い連想関係で結ばれていますが、さらに別の記憶組織要素 c とは、弱い関係でしか結ばれていない、といったように要素間の結びつきに重みづけがなされています。そして、このような要素間の結びつきに強弱をつけるということこそが、記憶および物事の意味の本質なのです。

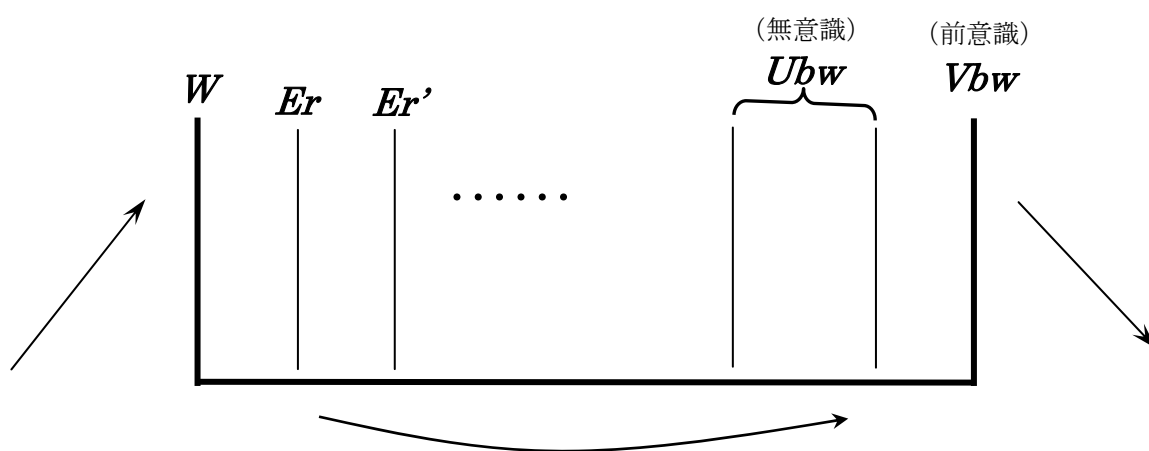
心的装置に様々な刺激が繰り返し流れていくごとに、すなわちいろいろな経験を積むごとに、このような諸要素間の連想による結びつきの強弱は少しずつ変えられ(記憶がかきかえられ)、その個人独特の記憶体系ができていきます。

説明の次の段階に移りましょう。ここではじめて、夢についての考察が「心的装置」の

モデルに反映されることとなります。

われわれはこれまで知覚末端における心的装置の組み立てについて、夢および夢から導き出すことのできる心理学的解明を顧みることなく考えを進めてきた。しかし心という装置の別の一部分を認識しようとするさいには、夢がわれわれの証明の源となってくれるのである。もしわれわれが、その一方が他方の活動に批判を加え、その結果意識化が行われなくなるような、そういった二つおりの心的検問所をあえて仮定しなかったとしたら、われわれは夢形成を説明することができなかつたわけである。

批判を加える側の検問所は、批判を加えられる検問所よりも、意識に対してより親密な関係を保っているとわれわれは推論した。前者は、後者と意識とのあいだに屏風のように立っている。われわれはさらに、批判を加える検問所を、われわれの覚醒時生活を指揮し、われわれの自由勝手な意識的な行動に決定を下すところのものと一致させる支持点をいくつか発見した。ところで今、これらの検問所を、われわれの仮説に従って組織に置き換えてみると、上述の認識によって、批判を加える組織は運動末端近くにあるものと想定される。そこでわれわれは両組織をわれわれの図式に取入れ、それらに与えられた名称によって、それらの意識に対する関係を表示してみよう（第三図参照）。



第三図

運動末端に位置する諸知覚中、その最後のものをわれわれは前意識 (*Vbw*) と名づける。もしもある種の条件が充たされたならば、たとえばある程度の強度の獲得とかいうような条件が充たされたならば、その組織中の興奮の諸過程は遅滞なく意識面上に上りうることを暗示しようがために、われわれはこの「前意識」の語を選んだのである。それは同時に、随意的運動力への鍵を握っているところの組織でもある。この組織の背後に位する組織をわれわれは無意識 (*Ubw*) と名づける。それは前意識を通過する以外には意識へ通ずるいかなる途をも知らない。そして、前意識を通過するさい、その興奮過程は諸種の変更を甘

受しなければならない。

以上の諸組織中のどれにわれわれは夢形成への動因を求めるべきか。簡単にいえばそれは組織 **Ubw** (無意識) である。これについてはのちに述べようと思うが、じつはそういつては正しくないので、夢形成は前意識の組織に属するところの夢思想に結びつくべく余儀なくされているのである。しかしまたわれわれは、夢願望を論ずる別の箇所で、夢の原動力は **Ubw** から援助を受けるということを知るであろう。そしてこの最後の契機のゆえにわれわれは無意識の組織を夢形成の出発点と仮定しようと思う。ところでこの夢興奮は、すべてその他の観念形成同様に、前意識内に侵入し、前意識から意識へと入ってゆこうという努力を示すであろう。

ひとつ注意しないといけないのは、前意識 (**Vbw**) と無意識 (**Ubw**) という語が、ここでは心的組織の名称として用いられているということです。これまでも意識とか無意識という言葉を使ってきましたが、それは主にある心の状態を形容する語として、つまり「意識的」か「無意識的」か、といった意味で用いてきました。これに対して、上の引用中の、組織**Vbw**および組織**Ubw**は、心的装置の中に明確に位置づけられる組織の名称です。原文では、**das Vorbewußte** (前意識のもの) の略語として**Vbw**という記号を、**das Unbewußte** (無意識のもの) の略語として**Ubw**という記号を用いることで、この区別を明確にしようとしています。

以上のようなモデルを使って、覚醒時および睡眠時における心的過程について説明してみます。まず、覚醒時ですが、知覚末端から入力された興奮が、無数の Ψ 組織を駆け抜けていきますが、そのほとんどは無意識的になされます。そして、運動による放出の直前、興奮が **Ubw** 組織から **Vbw** 組織に伝わったところで、初めてその興奮過程は意識可能な状態になるわけです。ただし、その際に、無意識的な興奮過程のうちで意識化されてまずいような性質のものは検閲によって排除されるか変形されてしまいます。運動末端に向かつて伝わってきた興奮は最終的には意識化され、運動によって放出されます。

次に睡眠時ですが、この場合は2通りの過程がおこりえます。ひとつめは、上に挙げた覚醒時とだいたい同じで、**Ubw** 組織の思考が歪曲により検閲をのがれながら **Vbw** 組織に流れ込んでくるというものです。睡眠中は、通常運動による興奮の放出はなされませんから、このような過程は抽象的な思考が思い浮かぶだけの夢 (フロイトの挙げた例では「アウトディダスカーの夢」のような) になります。しかし、このような過程は夢としてはむしろ例外的なものです。多くの、知覚の性質を伴った、すなわち幻覚的な夢においては、これとは別の心的過程がおこります。

幻覚的な夢の中において起こる過程は、つぎのごとく記述されるよりほかはないと思う。つまり「興奮は逆行的な途を採る」のである。興奮は、心の運動末端のほうへ向かって移動してゆく代りに、知覚末端のほうへ向かって移動してゆく。そして最後に知覚組織に到

達する。心的過程が無意識から覚醒時中において動いてゆくような方向を前進的方向と名づけるなら、われわれは夢について、「夢は退行的性格を持つ」といって差支えない。

(中略)

夢の中で表象(観念)が、それがかつてそこから出てきたところの感性的形象へ逆戻りしてゆくことをわれわれは退行と名づける。

(『夢判断』)

ここでようやく「退行」という概念が登場しました。退行とは、局所論の図において興奮が通常のように知覚末端(W)から運動末端(M)という方向に移動していくのではなく、運動末端から知覚末端の方向に移っていくことなのです。退行は夢過程に特徴的にみられますが、夢だけに固有のものではありません。例えば、ある場面を思い描いたりする時には、抽象的な思考から具体的なある場面の記憶という風に、興奮が知覚末端の方向に向かって移動しており、部分的な退行といえるでしょう。しかしこの場合その場面が思い浮かべられるだけで、知覚されるわけではありません。正常な大人の覚醒時における心的過程では、知覚を出現させるような完全な退行はおこらないものです。

一方、精神の病的な状態においては夢と同じ様な退行が起こり得ます。すなわち、実際にはない物が見えたり、ない音が聞こえたりする、「幻覚」という症状です。幻覚においては、抽象的観念が具体的な知覚の記憶を越えて、知覚そのものを出現させてしまい、その知覚は本人にとって現実から来た知覚と区別できなくなるのです。

ところで、その後の心理学や精神医学で、一般に「退行」という時には、ここでの使用(これがオリジナルなのですが)とは若干ニュアンスの異なる意味で用いることが多いようです。これについても、フロイトは言及していますので引用しておきましょう。

なお退行についていっておきたいのは、退行は神経症的症状形成の理論においても夢理論におけると同様の大きな役割を演ずるということである。そこでわれわれは、退行に三種類のを区別する。第一、ここに展開させたW組織の図式の意味での**場所的退行**。第二、過去の心的形成物への立ち戻りを問題にするかぎりでの**時間的退行**。第三、原始的表出方法や描写方法が普通の表現・描写方法の代理をつとめる場合の**形式的退行**。しかし、すべてこれらの退行は結局のところ同じものであって、多くの場合いっしょになっている。なぜなら時間的に古いものは、同時に形式的に原始的なものであり、そして心的局在性においては知覚末端の近くに位置しているからである。

同 308 ページ

つまり、私たちが日頃「退行」という語を使うときには、もともとの意味である第一の「場所的退行」を無視して(あるいは知らずに)、第二の「時間的退行」、第三の「形式退

行」の意味で用いていることが多いのです。それはそれで間違っていないですが、フロイト自身は中期及び後期の理論においても「退行」と言うときには、場所的退行ということも意識して用いている場合が多いので、この辺を十分に理解しておかないと誤解を生じる恐れがあります。

さて、これで退行についての一応の理解はできたのではないかと思いますが、まだ充分とはいえません。ここまでは単に、正常な心的過程において興奮が知覚末端から運動末端の方向に流れるのに対して、夢や幻覚においては逆方向の興奮の流れが起こるということ述べ、それに「退行」という名前をつけただけのことです。

夢が（そして幻覚も）退行的な願望充足である、ということの深い意味を知るためには、「そもそも願望充足とはなにか」ということを明らかにしなくてはなりません。

人間の心というものは、もともとできるだけ自分を無刺激な状態におこうとする傾向がある（恒常原則）、とフロイトは考えています。例えば、生まれて間もない乳児がお腹もいっぱいやすらかにまどろんでいるような状態が、理想の「無刺激な状態」と言ってよいでしょう。ここに外的な刺激、例えば何らかの痛み刺激のようなものがやってくると、乳児は反射的な逃避反応によってこの不快な刺激から逃れようとします。このような反応は場合にもよりますが目的にかなった運動となりえるでしょう。しかし、刺激が外部からではなく、内部から来た場合、つまり空腹のような内的な欲求がせまってきた場合にはどうでしょうか。乳児は泣いたり手足をじたばた動かしたりするでしょうが、それだけでは問題の解決になりません。ここに、母親がやってきて乳を与えてくれてはじめて欲求が解消されて満足体験がもたらされるのです。

この体験の本質的一構成要素は、ある種の知覚の出現（小児の例でいえば乳を授けられること）であり、この知覚の記憶像は、そのとき以来、欲求興奮の記憶痕跡と連想的に結合して、あとに残る。この欲求がそのつぎに現れるや否や、ききに成立している結合関係のおかげで、ひとつの心的興奮が生ずるのであろう。この心的興奮は、かの知覚の記憶像を再生させ、知覚そのものをふたたび喚起しようとし、だから結局第一次満足の状況を再現させようとする。われわれが願望と名づけているものは、こういう興奮にほかならない。知覚の再出現が願望充足である。そして欲求興奮が知覚を完全に再生させるとというのが、願望充足への最短の道である。その中においてこの道が実際に以上述べたような順序で歩まれるところの、また、したがってその中においてこの願い望むことが一種の幻覚作成に終るような、そういう人間の心の原始的状態を仮定しても一向に差支えはないわけである。したがってこの最初の心的活動は、**知覚同一性**を、つまり欲求の充足に結びついているところの、かの知覚の繰返しを目ざしているのである。

(同 329 ページ)

「知覚の再出現が願望充足である」と、言い切ってしまうところがすごいですね。われわれの日常的感覚からすると、願望というのはある種の「行動」をめざしているように思えます。しかしよくよく考えてみると、最終的にめざしているのはその行動の結果もたらされる「体験」であり、さらにいえば「体験」とはある出来事を、五感を通じて知覚することなんですよ！

われわれの願望が最終的にめざしているのが運動でなく知覚であるというのは、なかなかおもしろい洞察でしょう。こういう前提に立てば、行動によって現実をかえることで実現される願望の充足よりも、ある知覚が退行的にもたらされ体験されるという、夢や幻覚における願望充足の方が、より手っ取り早く直接的な願望充足であるともいえます。退行的願望充足こそが願望充足のむしろ原型なのです。

もっともこの方法では、現実においては真の問題解決にはならないために、長い目で見ると本人に大きな快感をもたらしません。上の乳児の例でいえば、母親が来てくれない限りいつまでも空腹という身体的欲求は満足されないからです。そこでもうすこし心身が成熟してくると、考え、行動することで現実を変え、望まれる知覚を現実から得ようという試みがなされるようになるでしょう。母親を呼ぶとか、はって母親のもとに行くとか、さらに自分で食べ物を見つけて食べるとか、より高度で複雑な行動ができるようになってきます。より複雑な思考、より自由な運動制御の能力がつくことで、行動による願望充足の可能性は広がります。そうなると行動が願望充足のための主要な方法となり、退行的な方法は現実適応的でないので影をひそめるようになるのです。覚醒時においては、空想を越えて知覚を直接出現させるような完全な退行（幻覚）は行動による願望充足の妨げになるためおこらなくなり、睡眠中の夢の中でのみ退行という原始的な心的過程が許されるようになるのです。

もうひとつ、興味深いのは願望が「知覚の再出現」であるということです。なぜ「再」出現なのでしょう。日常的感覚から言うと、私たちはこれまでと同じものよりも、なにか新しい刺激を求める傾向があるような気がします。一方では、小さな子供の遊びなど見ていると何度でも飽きずに同じことをやるという傾向があるようですし、われわれ大人の中にも古いものを懐かしむ気持ちもまたありそうです。新しいものを求める気持ちと、古いものの再現を求める気持ちと、どちらが人間の本質的な傾向なのでしょう。

これについてはいろいろな意見があるでしょうが、私は後者の方が本質的だと思います。私たちが一見「新しいもの」を求めているように見えるときでも、それは完全に未知のものではなく、かつて出会った古いなにかと象徴的に関連したものなのです。また、私たちが古いものに飽きて新しいなにかを求める時、それは単に、真に求めているもっと古い何かとの連想の向けられる対象が、あれ（古いもの）からこれ（新しいもの）へと変わったというだけのことなのではないでしょうか。

第一次過程と第二次過程

以上を整理して、局所論の図にあてはめてみると次のようになります。心の組織の大部分は組織 **Ubw** であり、ここでは様々な興奮が、原始的で直接的な願望充足すなわち知覚同一性の獲得を通じて発散されることをめざしています。そこには時間の概念はなく、ある観念から別の観念へと興奮の移動が比較的自由に行われます（特に反対物への転換が容易になされること）。このような原始的な心的過程を「**第一次過程**」と呼びます。

興奮が運動末端近くの組織 **Vbw** に伝わると、心的過程は第一次過程とは様相の違ったものとなるため、「**第二次過程**」と呼ばれます。そこでは、やみくもに知覚同一性をめざすのではなく、運動の制御を通じて、望まれる知覚を生み出すように外界を変えることが目標となります。第二次過程では、ある観念に結びついた興奮は、容易には他の観念には移動できず、「論理」というルールに従わなくてはなりません。時間の概念が存在し、運動による興奮の放出を、状況によっては延期する判断（「我慢」とよばれる）がなされます。すなわち、第二次過程とは、私たちが通常意識的におこなっている「思考」という心的活動に他なりません。第二次過程においては、ひたすら知覚同一性を求めるのではなく、「思考同一性」を追求することが目的になります。

上記の二つの過程のうち、第一次過程の方がより根元的な心的過程であり、第二次過程は生活の必要からやむをえず生み出された高度な心的過程といえます。つまり、人間にとって本当は第一次過程の方が心地よく負担が少ないのです。しかし、少なくとも日中の生活においては、現実適応的な行動をするために、やむを得ず第二次過程が勢力をふるい第一次過程を抑えつけておく必要があるのです。夜になって人が眠りにつくと、その間はいろいろ難しいことを考えて行動する必要はなくなりますので、第二次過程の出番は少なくなり、昼間抑えつけられていた第一次過程が「さあおれたちのやりたいことをやるぞ！」とばかりに活発になります。夢が作り出される過程は典型的な第一次過程であり、より根元的な願望充足であると言えます。

局所論からメタサイコロジーへ

以上で『夢判断』における初期局所論の説明をひとまず終えます。繰り返しますが、あとは是非ともこの本を手にとり、ご自身でチャレンジしてください。

ところで、これが初期局所論と呼ばれるのは、フロイトがその後もこのような考え方を継続し発展させていったからです。最後にそのことについてふれておきましょう。局所（論）的な視点は、フロイトの精神分析理論の重要な柱ですが、後になってもう2つの視点、すなわち**力動的**および**経済的**な視点が加わります。力動的視点は、心的過程を相互に競合し干渉し合う力、すなわち欲動の側面からとらえようとします。経済的視点は、心的過程の量的側面に重点をおき、最終的にはさまざまな量の総和を問題にします。もともと、これらの視点はまったく新しくでてきたわけではなく、考え方としてはすでに『夢判断』に含まれていました。そういう意味でも『夢判断』は、処女作にしてすでに完成されていると

ころがあります。

局所的、力動的そして経済的という3つの観点から、人間の心を立体的に捕らえようとする方法を、フロイトは「メタサイコロジー」と呼び最も完璧な心理学であるとししました。その具体的な中身については、また次の機会に学びたいと思います。